コジュケイ　*Bambusicola thoracica*(小綬鶏)

識別のポイント

・「チョットコイ、チョットコイ（またはピッググィ）」と連続した大声で鳴く。
・ずんぐりしたからだつきでほおが赤い

大 き さ：ハトくらい
生息環境：低地～山地の森林（特に林縁部）
繁殖場所：森林や草地の樹上
餌：植物、昆虫、クモなど
鳴 き 声：「ピッググィ、ピッググィ…」「ピィー」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

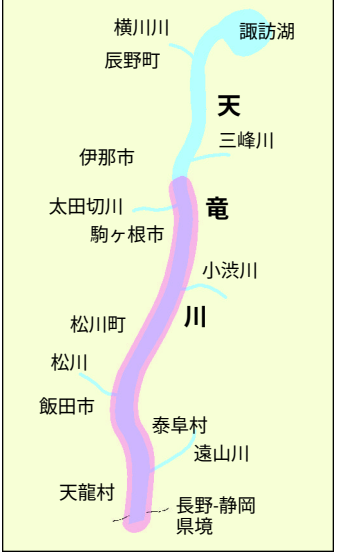
繁殖期

渡り区分：留鳥

一般習性・分布

・留鳥として、積雪の多くない地方の低地から山地に数多く生息する。河川敷にも多いが、近縁のキジが草地にも多いのに比べ、樹林のあるところを好む傾向がある。
・巣は林内の地上に浅いくぼみをつくり、草を敷いて卵を産む。
・「ピッググィ、ピッググィ…」を連続して次第にテンポを遅らせながら鳴く。「ちょっとこい」と聞きなされる。
・1919年に中国から移入され、以来、狩猟鳥として各地で放鳥され、その後、旺盛な繁殖力で個体数を増やし、分布域を広げてきた。

天竜川上流における分布



天竜川上流における生息状況

太平洋岸では河川敷などに極めて普通の種であるが、天竜川上流では個体数はあまり多くない。下伊那では比較的普通に見られるが、上伊那では少ない。

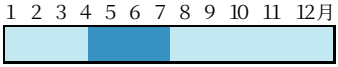
キジ　*Phasianus colchicus*(雉)

識別のポイント

・オスは緑光沢のある胸と赤い顔、長い尾羽根が目立つ。
・「ケーン、ケーン」と鳴いて羽根をドドド…と打ちならす。

大 き さ：カラスより大きい
生息環境：低地～山地の草原、森林
繁殖場所：森林や草地の地上
餌：植物、昆虫、クモなど
鳴 き 声：「ケーン、ケーン」(オス)

天竜川における生息時期



渡り区分：留鳥

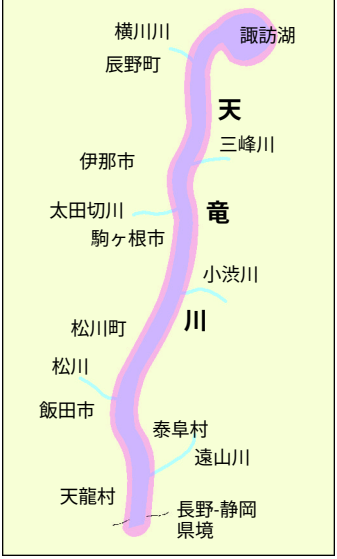
一般習性・分布

・留鳥として低地から山地の草原、耕作地、河原、林縁など、開けた場所にすむ。
・草むらの地上にくぼみをつくり、巣を造る。一夫多妻であることも多い。
・地上生活が主で、草の種子や昆虫などを食べる。
・日本の国鳥であるが、狩猟鳥でもあり、人工繁殖が容易なことから各地で数多く放鳥されている。

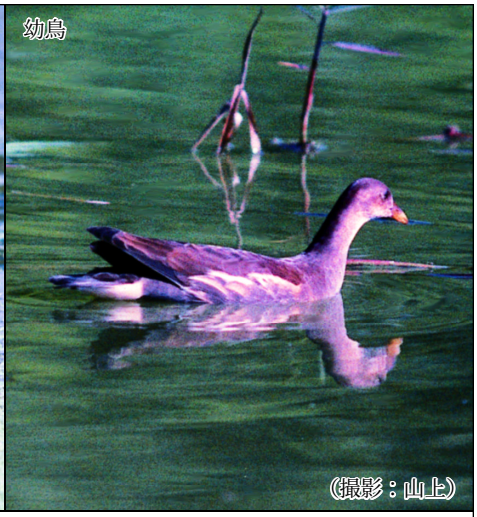
天竜川上流における生息状況

全域にわたって普通に生息している。特に、広い草地がある場所には多く見られる。猟期にはカモと共に銃猟により数多く捕獲されている。

天竜川上流における分布



バン　*Gallinula chloropus*(鷭)



識別のポイント

・全身が黒く、くちばしと額が赤い。
・尾の下部が白い。

大 き さ：ハトと同じくらい
生息環境：河川、湖沼、水田など
繁殖場所：水際の植物群落内の地上
餌：植物、昆虫、クモなど
鳴 き 声：「キュック、キュック」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

繁殖期

渡り区分：留鳥

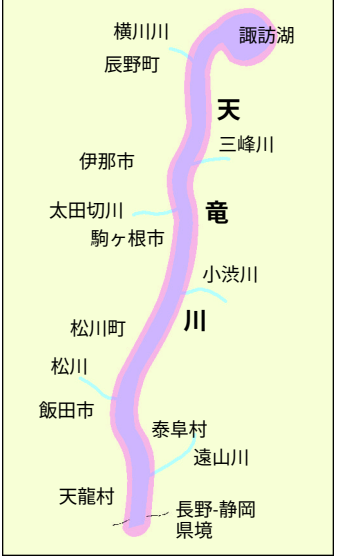
一般習性・分布

・留鳥として湖沼、川などの岸の湿地やヨシ原、水田などにすむ。比較的小さな水域でも、水生植物があれば生息している。
・水辺の草の中に枯れ草や枝を積み上げて巣を造る。
・地上や浅水中を歩いて草の種子、昆虫などをとる。水上を泳いで餌を捕ることも多い。やや警戒心が強く、危険を察知するとすぐに草かげに隠れる。

天竜川上流における生息状況

流れの早い本流部にはあまり出てこないが、高水敷内の水たまりや小流路、支川の流入部など、草に被われた場所に生息する。川路や伊那市付近の河原では、高水敷のヨシやツルヨシの群落内で繁殖を確認した。

天竜川上流における分布

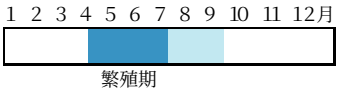


コチドリ　*Charadrius dubius*(小千鳥)

識別のポイント	・目の周りの黄色の輪がはっきりしている。 ・地上を素早く走り回る。

大 き さ：スズメより大きい
生息環境：河川、湖沼
繁殖場所：砂礫地の地上
餌　：昆虫など
鳴 き 声：「ピュィッ、ピュィッ」など

天竜川における生息時期



渡り区分：夏鳥

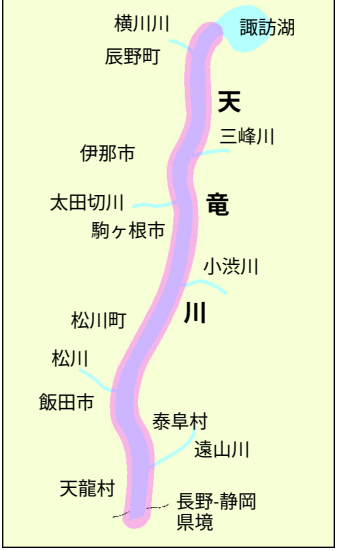
一般習性・分布

・夏鳥として、主に川の中流から下流の砂礫地に生息する。
・砂の上や地表に浅いくぼみをつくり、小石、木切れなどを敷いて巣を造る。卵は石によく似た模様で保護色となっている。
・地上を素早く歩いて昆虫などをとる。
・ヒナは外敵が近づくと身を伏せて動かなくなり、親鳥は怪我をしているふりをして注意を引こうとする擬傷行動をとる。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流ではあまり多くない。これは河川の下流から中流部に多いという一般的傾向に一致し、かわってイカルチドリが多い。しかし飯田市川路など、主として下伊那の広い砂礫地が広がる場所では普通に見られる。

天竜川上流における分布



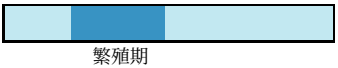
イカルチドリ　*Charadrius placidus*(斑鳩千鳥)

識別のポイント

・コチドリに似ているが、身体が大きくてくちばしがやや長い。
・「ピュイッ、ピュイッ」と鳴く。

大 き さ：ハトより小さい
生息環境：河川、湖沼
繁殖場所：砂礫地の地上
餌：昆虫など
鳴 き 声：「ピュイッ、ピュイッ」など

天竜川における生息時期



渡り区分：留鳥

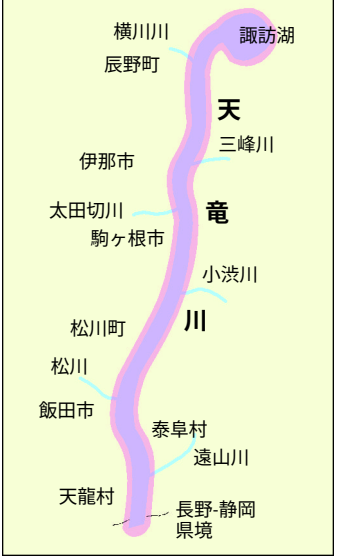
一般習性・分布

・留鳥として川の中洲や河原、湖沼、水田などに生息する。コチドリとよく似た種であるが、コチドリが河川の下流から中流部に多いのに対し、イカルチドリは中流から上流部に多い。
・砂上に浅いくぼみをつくり、小石、木切れなどを敷いて巣を造り、産卵する。営巣場所は植物があまり生えていない砂礫地の中洲で、これは、陸からのイヌやキツネ、茂みを好むヘビなどの侵入を防ぐ目的がある。

天竜川上流における生息状況

天竜川上流で最も普通に見られるチドリである。砂礫地のある場所を中心に全域で見られる。繁殖期は早いところで3月初旬から始まり、7月まで続く。南宮大橋の下流や飯田市川路付近、高森町市田付近、三峰川合流点下流などは、特に広い砂礫地がひろがっている区間であり、数十メートルおきに営巣していることがある。

天竜川上流における分布

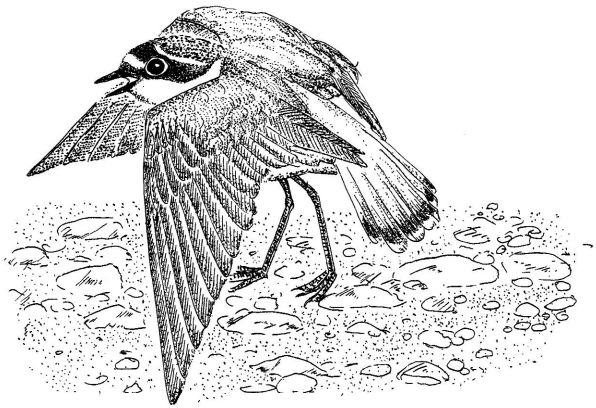


コラム　擬傷（ぎしょう）行動に注意！

地上に卵を産む鳥たちは、卵もヒナも親も、絶えず危険にさらされています。キツネやイタチなどの天敵に巣を見つけられてしまったら、卵やヒナは、まず助かるすべはありません。そこで親は、外敵が近付くと、卵やヒナの場所を見つけだされないように、何ともけなげな防衛行動をとります。それが「擬傷（ぎしょう）」です。擬傷は、親が外敵の目の前で、翼を不自然にたらしたり、足などが怪我をしているように歩いたりする行動です。こうすることで外敵の目を自分に向けさせ、できるだけ巣から遠くへと導くのです。

さて、こうした行動は、人間が無意識に巣に近付いたときにも行われます。近年のアウトドアブームにより、河原は釣り、キャンプ、バーベキューとたくさんの人が利用するようになってきました。河原で繁殖する鳥たちにとっては、これも大変な脅威です。もしも目の前で擬傷行動をとる鳥がいたら、静かに、すみやかに、足下に注意してその場を去って下さい。必ず近くに飛べないヒナがいるか巣があるはずです。決してヒナや卵を探そうとしないで下さい。簡単に見つかるものではありません。

人間のレジャー空間と鳥たちの繁殖地とのすみ分けは大変難しい問題ですが、せめて、春から夏の間は中洲へは絶対に入らないよう心がけてもらいたいものです。まして、やたらにタイヤの大きなＲＶ車などで川を渡ったり、ロケット花火を打ち上げたりすることは、もってのほかです。



イカルチドリの擬傷ポーズのひとつ

タゲリ　*Vanellus vanellus*(田鳧)

(撮影：戸谷)

群れで飛ぶ

識別のポイント

・幅広くて大きい翼をふわふわと羽ばたかせて飛ぶ。飛び立つとき「ミュー」と鳴く。
・頭に黒い飾り羽根がある。

大 き さ：ハトと同じくらい
生息環境：河川、休耕田など
繁殖場所：(日本で繁殖することは稀)
餌：昆虫、ミミズ、カニ、貝など
鳴 き 声：「ミュー」など

天竜川における生息時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
■	■	■								■	■

渡り区分：冬鳥

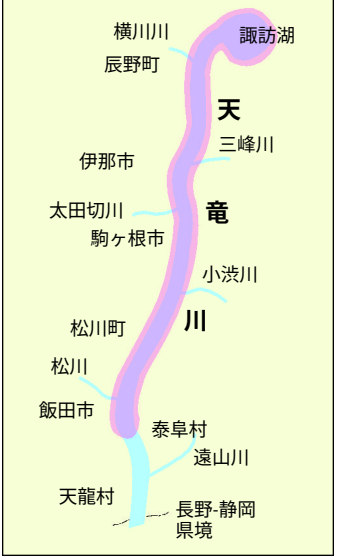
一般習性・分布

・冬鳥として、広い耕作後の水田や河原に生息する大型のチドリ。
・数羽から数十羽の群れで、湿った広い場所で餌をとる。
・飛びたつときに「ミュー」という猫のような声で鳴く。長くて幅広の翼でふわふわと羽ばたく。

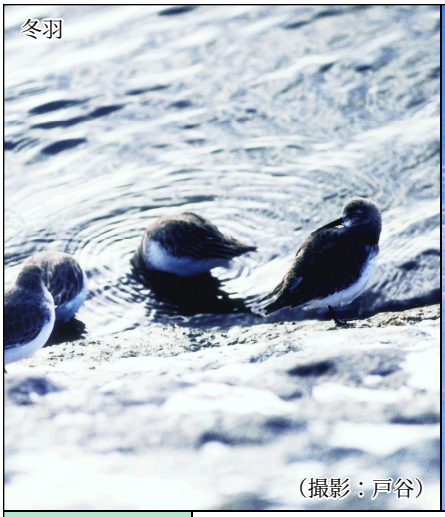
天竜川上流における生息状況

冬鳥として全域で見られるが、数は多くない。単独でいることもあるが、秋の渡来当初には十数羽の群れが見られることもある。飯田市川路や伊那市周辺など、広い河川敷を有する区間では頻繁に見られる。

天竜川上流における分布



ハマシギ　*Calidris alpina*(浜鷸)



識別のポイント

・くちばしと足がやや長い小型のシギ。
・群れで行動し、浅瀬でせわしく動きながら餌をとる。

大 き さ：スズメより大きい
生息環境：河川、干潟
繁殖場所：(日本では繁殖しない)
餌：底生動物、カニ、貝など
鳴 き 声：(飛びながら)「ジュリュー」など

天竜川における生息時期

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
■	■	■	■						■	■	■

渡り区分：冬鳥、または旅鳥

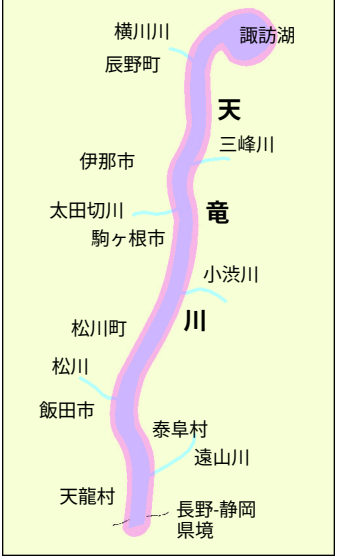
一般習性・分布

・冬鳥、または旅鳥として広い河原や干潟などに数多く渡来する。渡りの中継地の干潟では、数千羽の大きな群れを見ることができる。一部は内陸の河川や海岸沿いで小群に分散して越冬する。
・水際を歩きながら、くちばしを下にしたままで震動するように水中をつつき、餌をとる。

天竜川上流における生息状況

渡り鳥のシギの中では比較的数多く見られる鳥であるが、飯田市川路などの広い河道の中洲を10～30羽程度の群れで静かに移動しているため、なかなか目に付きにくい。天竜川上流では、秋から翌4月頃まで見られる冬鳥である。

天竜川上流における分布



キアシシギ　*Tringa brevipes*(黄脚鷸)

水田で採餌する

(撮影：戸谷)

識別のポイント

・翼や腰全体が灰色の中型のシギで、目立つ模様がない。
・くちばしと足が長い。

大 き さ：ハトよりやや小さい
生息環境：河川、水田など
繁殖場所：(日本では繁殖しない)
餌：底生動物、カニ、貝など
鳴 き 声：「ピューイ、ピューイ」など

天竜川における生息時期

渡り区分：旅鳥

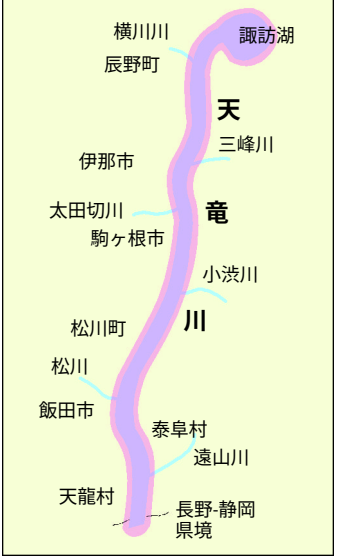
一般習性・分布

・旅鳥として春と夏、広い川の岸や水田に渡来する。10数羽の群れをつくることも多い。内陸の河川では春の渡りの時期に多い。
・浅瀬で水中の小動物をあさることが多いが、水際から離れた草地でも陸上昆虫などを捕らえる。
・しゃっくりをするように首をピョコンと伸ばしたり、尾を振る動作をする。これは、イソシギなど近縁の種にもよく見られる。

天竜川上流における生息状況

春の渡りの時期に全域で見られ、特に南宮大橋や飯田市川路など、広い河道を持つ区間に多い。辰野町荒神山付近では、河道は広くないが10数羽の群れが見られる。渡来時期は、旅鳥としては長く、4月から6月の初めまで見られる。秋はあまり見られない。

天竜川上流における分布



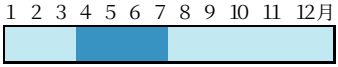
イソシギ　*Tringa hypoleucos*(磯鷸)

識別のポイント

・くちばしと足はやや長いが首は短い。
・翼をこきざみにふるわせるように飛ぶ。
・飛びながら「チィーチィー」とよく鳴く。

大 き さ：スズメより大きい
生息環境：河川、湖沼、水田など
繁殖場所：水辺（まばらな植物群落中の地上）
餌：底生動物、陸上昆虫など
鳴 き 声：「チィーチィー」など

天竜川における生息時期

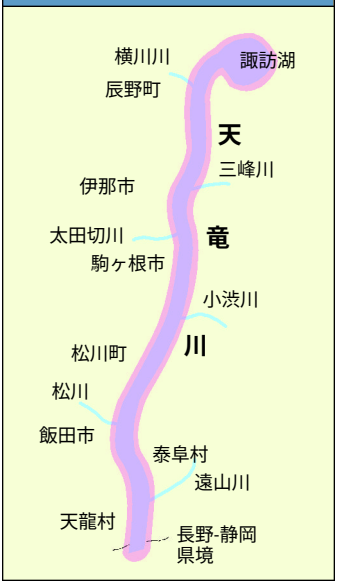


渡り区分：留鳥

一般習性・分布

・留鳥として内陸の河川で最も普通に見られるシギ。繁殖期には低地から亜高山帯の広い範囲の河原で見られる。
・広い河原や中洲の地上に浅いくぼみをつくり、ヨモギの葉などを敷いて簡単な巣を造る。巣は、草や低木の根の際にあることが多い。
・水際を歩いて小動物をついばむ。また、コンクリート護岸の上や草地を歩きながら、陸上昆虫を捕らえることも多い。
・尾を上下に振っている姿をよく見かける。

天竜川上流における分布



天竜川上流における生息状況

全域で一年を通して最も普通に見られるシギであるが、春から夏の方が個体数が多い。南宮大橋の下流では、カワラヨモギ（キク科の植物）がまばらに生えた砂地の、株の際に営巣していた。同じ中洲の、植物の生えていない砂礫地で繁殖していたイカルチドリとは、営巣環境の植生が異なっていた。

タシギ　*Gallinago gallinago*(田鳴・田鷸)

識別のポイント

・くちばしがまっすぐで長い。
・飛び立つときに「ジェッ」と鳴く。

大 き さ：ハトと同じくらい
生息環境：河川、休耕田など
繁殖場所：(日本では繁殖しない)
餌：底生動物、陸上昆虫など
鳴 き 声：「ジェッ」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

渡り区分：冬鳥

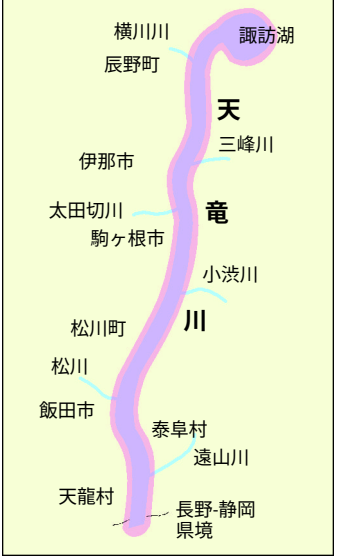
一般習性・分布

・冬鳥、または旅鳥として水田、河岸などの湿地に渡来する。警戒心が強く、草かげに隠れていることが多いため目立たないが、渡来数は比較的多い。
・タシギを含めたジシギ類（オオジシギ、チュウジシギなど）はお互いに形態が非常によく似ており、野外での外見だけの識別は難しい。
・主として夕方から活動し、湿地や浅水中でミミズや昆虫の幼虫などをとるが、小流路や植物に囲まれた水辺などでは昼間でも餌をとる。

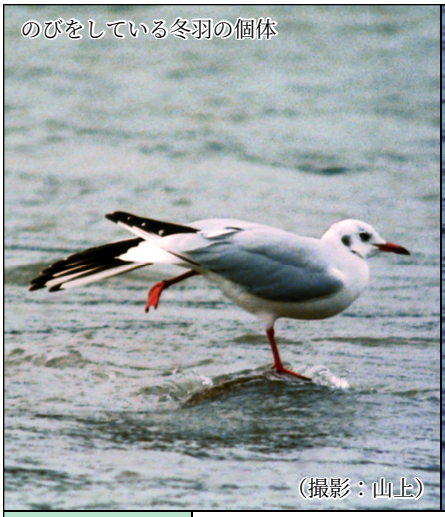
天竜川上流における生息状況

冬鳥として全域に渡来し、特に秋の渡りの時期には多い。本流付近よりも、農業用の用水路や支川合流部の細い流れなどの草かげにいることが多い。

天竜川上流における分布



ユリカモメ　*Larus ridibundus*(百鷗　)


のびをしている冬羽の個体

（撮影：山上）

夏羽

識別のポイント	・身体全体が白く、目の後ろに黒い模様がある。 ・くちばしと足が赤い。

大 き さ：ハトより大きい
生息環境：河川、湖沼、海岸など
繁殖場所：（日本では繁殖しない）
餌　：魚、動物の死体など
鳴 き 声：「ギィー」「グァッ」など

天竜川における生息時期

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月

渡り区分：冬鳥

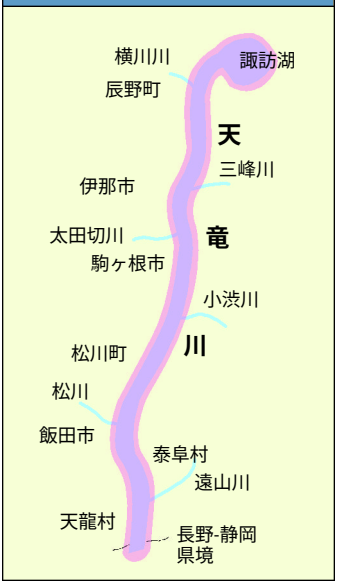
一般習性・分布

・冬鳥として広い川、湖沼などに生息する。海岸沿いに大きな群れをつくって生息するが、内陸部にも餌を求めて小群で飛来する。
・雑食性で、水の上をゆっくりした羽ばたきをしながら飛んで餌を探し、見つけると反転したり急降下して捕まえる。また、浅瀬で藻類をあさったり、魚や動物の死体を食べる。

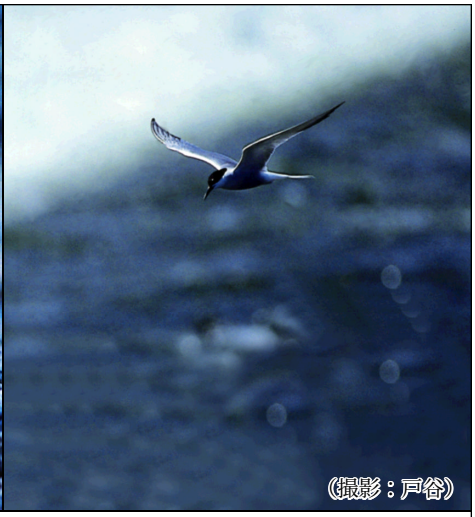
天竜川上流における生息状況

冬場、数羽から10数羽の小さな群れで飛来するが、これらは下流側から餌を求めて移動してくるものと考えられる。天竜川上流では他にもウミネコやセグロカモメなどのカモメ類が記録されているが、いずれも迷い込んできたか、下流から出張してきたかのいずれかである。その中でもユリカモメは最も頻繁に飛来する種である。

天竜川上流における分布



コアジサシ　*Sterna albifrons*(小鯵刺)



識別のポイント

・ツバメのような形をしているが身体が白く、頭が黒い。
・水に飛び込んで魚を捕まえる。

大 き さ：ハトより小さい
生息環境：河川、湖沼など
繁殖場所：砂礫地の地上
餌：魚
鳴 き 声：「キリリッ」など

天竜川における生息時期

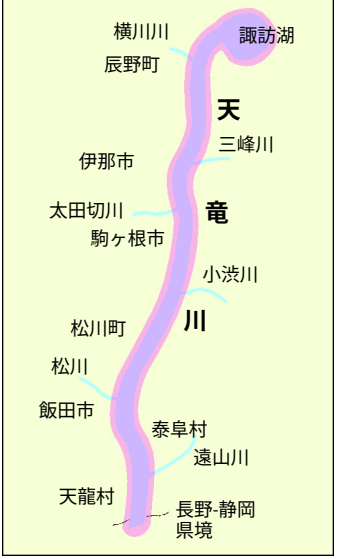
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
				■	■	■	■				

渡り区分：夏鳥

一般習性・分布

・夏鳥として広い川や河口部に渡来する。行動域が広く、餌を求めて川からかなり離れた池などにも現れる。
・大きな川の中洲や埋め立て地の砂礫地などで集団繁殖する。
・巣は砂上に浅いくぼみをつくり、小石や木片を敷いて産卵する。
・水の上をゆっくりとした羽ばたきで飛びながら魚を探し、ホバリングの後、急降下して水中に突っこみ、魚を捕らえる。
・全国的な繁殖地の減少から、環境庁のレッドデータブックにおいて希少種に指定されている。

天竜川上流における分布



天竜川上流における生息状況

長野県下でも数少ない繁殖地の一つが、高森町の天竜川にある。5月下旬から6月にかけての渡来当初は、数10羽の群れが飯田から高森町周辺で見られるほか、餌を求めて上伊那へも飛来する。しかし天竜川の繁殖地は現在の所1ヶ所に限られており、今後の繁殖分布の変化が注目されている（P.62参照）。

コラム　天竜川で集団繁殖するコアジサシ

春から夏にかけて、天竜川上流の一部の地域ではコアジサシの姿を見ることができます。4月の下旬に南の国からわが国に渡ってくるコアジサシは、集団で子供を育てて、夏が終わるころになると、再び南の地方に帰っていくのです。

日本では主に海岸の砂浜や埋立地および河口の中洲などで繁殖していますが、天竜川のような内陸の河川の中洲でも繁殖することがあります。この鳥の集団繁殖地（コロニー）は本州以南の全国に存在していますが、ごく限られた場所に偏って分布しているので、一般にはあまり目に触れることはありません。

長野県内におけるこの鳥のコロニーは、最近の報告では善光寺平の犀川と千曲川の合流点付近、安曇平を流れる高瀬川の池田町付近（長野）、伊那谷の天竜川の高森町付近の3ヶ所に存在しています（図－1）。いずれの場所も、ごく限られた範囲内の中洲に巣が集まってコロニーを形成しています。巣は5～10mくらい離れているのが多いのですが、中には隣の巣と1mぐらいしか離れていない場合もあります。

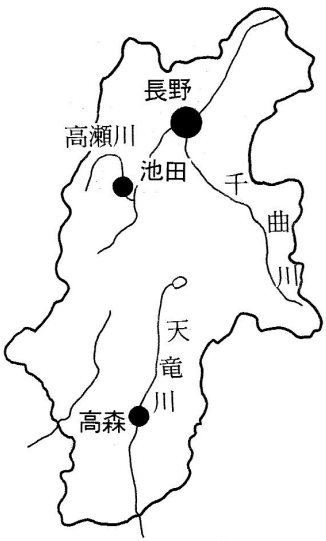


図-1　長野県内のコアジサシの分布

天竜川の場合、飯田市の天竜峡から中川村までの広い範囲で、魚を求めながら川や池の上空を飛翔しているこの鳥の姿を見かけますが、集団営巣地は高森町にあります。それは1991年高森町の下市田付近の中洲で確認されたのですが、それ以前にもこの付近で繁殖が行われていたという断片的な記録があります。

コアジサシの巣

長野県に存在するコロニーの規模は、犀川・千曲川の場合は50～100巣であり、高瀬川では10巣前後と言わ

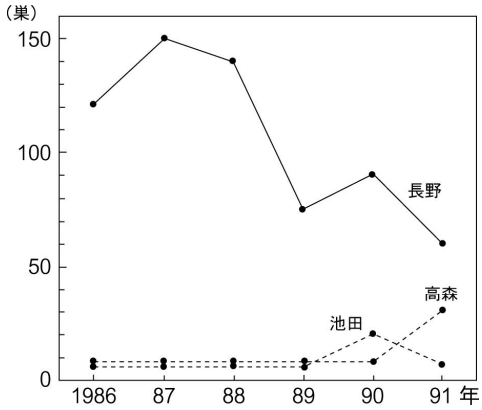


図-2　長野県内のコアジサシの営巣数（鳥羽,1991）

れています（図－2）。天竜川の場合は1991年には23巣が確認され、1995年および1996年には10～15巣が集まっていましたが、規模としてはあまり大きくありません。善光寺平のコロニーでは、近年になってだんだん規模が小さくなり、今では100巣をかなり下回っていると言われていますが、天竜川においても1991年をピークにだんだんと巣の数が少なくなっているようです。全国的に見ても、長野県のような海のない山国で繁殖するコアジサシのコロニーは大変珍しいので、このまま減少が進まないように、これからも注意深く見守っていきたいものです。そのためにはこの鳥が安心して繁殖が行えるような環境を維持していくことが大切であると思います。

この鳥の集団営巣地は、両側が流れによって岸から隔離され、人間や動物が簡単には近付くことができない中洲の中にあります。その中でも草や低木の生えている場所は嫌われ、砂と小さな石が混ざった砂礫地が好まれています。近年は上流のダム等によって治水が進み、洪水が起きなくなったことはわたしたち人間にとってありがたいことですが、そのため中洲に草地が発達して、コアジサシは営巣を避けるようになりました。また、アウトドア・レジャーが発達して、釣りや車の進入等で我々人間が中洲に近付きすぎているのも、この鳥が営巣を敬遠する大きな原因になっています。そこで、機械の力を借りて中洲の両側の流れを深くしたり、草をはぎ取って砂礫地を多くしたりして人工的な中洲を造ってやることも大切になってくるでしょう。また、地域の人たちにその大切さをわかってもらい、私たち人間が、彼らの子育てを遠くから温かく見守ってあげる気持ちも必要だと思います。

（大原　均）